

ゲリラという感情の構造

——一九九〇年代における男性性・テロ・「日本人」

ブライアン・バーグストロム

訳 友田 義行

序 美学としてのアイデンティティー

深作欣二監督の『バトル・ロワイアル』(二〇〇〇年)は、監督と国会議員との論争のさなかに封切られた^{訳注①}。この作品は明らかなバイオレンス映画である一方で、真のヒロイズムは如何なる時も可能な限り暴力の行使を避ける方法を模索するものであることを描いている。また、戦争とは、腐敗した大人たちが子どもたちを利用して、国を良くしようなどというファシズム的パラノイア的な空想を実現するゲームであることを暗示している。この映画の主人公は、事故や反射的な自己防衛以外では誰も殺すことなく、なんとかゲームを乗り切って生き残る。二〇〇三年には、続編『バトル・ロワイアルⅡ 鎮魂歌』^{レクイエム}が公開された。だが、主要登場人物たちの高潔な行為には、前作とは大きく異なったヒロイズムの描写が用いられているように思われる。この作品は、二〇〇一年に米国で世界貿易センタービルとペンタゴンへのテロがあった九・一一後に作られ、アメリカの「テロとの戦い」やイラク占領を軍事的に支援すべきか否かという、日本の公的領域の限界に関わる加熱した議論が高潮に達する中で公開された。映画は、世界貿易センタービルが崩壊する光景と不気味に似通った、高層ビルの倒壊現場で幕を開ける。実際の事件と同様、虚構であるこの破壊もまたテロリストの手によるものである。だ

が、映画の場合、テロリストはイスラム原理主義者ではなく日本人であり、ゲリラ組織を率いるのは一作目で殺人ゲームを生き延びたのと同じ平和を愛する主人公である。ゲリラである主人公は、一作目でクラスメートの大部分を殺害したパラノイア的でファシズム的な大人たちが指導する日本政府に対し、一連の攻撃を仕掛けてきた。この映画は、無垢で戦うことを知らない子どもたちに兵役を強い、ゲリラの要塞を侵略するために彼らを送り込んでゲリラたちを一掃しようとする、日本の不正な企てを物語る。第一作では、国家の名のもとにふるまうよう国民に強制する暴力と、国家から逃れようとする主人公の奮闘が描かれた。だが、続編での主人公はむしろ、国家色に染まったアイデンティフィケーションを明確に定義するために戦う欲望を典型的に示している——その定義が現在の支配体制と一致しない場合でも、あるいは一致しない場合にこそ——。

『バトル・ロワイアル』とその続編の記述からこの論文を始めるのは、この映画が、一九九〇年代に日本の様々な場で議論され九・一一後確実に結晶化していた、戦争・男性性・日本のナショナル・アイデンティティーに関する議論を浮き彫りにする好例だからである。これから紹介していくように、これらに関する議論は、ゲリラ戦士としての日本人男性の人物形象に立ち返っていく。一九九五年のオウム真理教地下鉄サリン事件、

あるいは九〇年代中盤以降メディアの注目を集め過剰に不安視されてきた少年たちによる陰残な殺人といった憂慮すべき出来事が増加、いつも景気後退の長期化に関連付けて語られるナショナル・アイデンティティーの虚像的な亀裂。これらを奇跡的に癒すために、ゲリラ戦士としての日本人男性像が利用されるのである。この人物形象はまた、イラクでの戦争を支援するために軍隊を差し出せという米国からの圧力に対し、日本が国家として明確な応答を形成するのに苦勞している今日、こうした国内問題と海外政策に対する議論とを接続する方法としても機能する。経済不況・国際紛争・国内テロリズム・少年犯罪・そしてナショナル・アイデンティティーの偏心化。これらをつなぐ換喩の鎖は、現在国家を蝕んでいるらしい「絶望」の空虚な空間とは正反対のものとして概念化された、稠密な「希望」の感覚を日本に回復させる方法を見つける必然性を何度も訴えてきた。

しかし、ある種の理想的な人物像に感情を投入する観点からナショナル・アイデンティティーについて議論するには、どのようにすればよいのだろうか。二〇〇二年の著書『近代日本のアイデンティティー再考』^{原注①}で飯田由美子は、日本が自己定義を企てる展開の中で主要な役割を演じてきたナショナル・アイデンティティーに照準した日本思想史を再読することを提唱している。彼女の議論の本質は、「近代言語自体の範囲から追放されたすべての事物を、明確に（そして近代世界によって形作られ育まれた合理的思考様式への挑戦を表すように）表現」（二頁）することへの絶え間ない欲望の、一瞬の現われを再検討することにある。したがって、日本の歴史過程に種々とりとめのない形で現われるナショナルリズムは、合理的思考様式としてではなく、一種の美学として理解され批評されねばならない。彼女は出発点として、テリー・イーグルトンの、矛盾に基づいた言説としての美学の定義を用いる。美学は一方で自身を「研究」の

形式とし、「知的学問分野」であると主張する。だが他方で美学は、芸術的活動としての感情的領域と近接する。「美的なものは他には求めがたい独特の趣をとどめている。それはわれわれに、疎外されていない認識の様態とはいかなるものか、一種のパラダイムを与えてくれる」^{原注②}。美学のこうした性質——学問であろうとしながら、言語化できない感情をも対象に含めようとする——は、自らの知的学問性の論理を「ほどいて」しまう。飯田はこの疎外が近代性自体の特性であると述べる。そして、ナショナルリズムの表現を、近代化過程の特徴となっている画一化・疎外・抽象化といった侵害への異議申し立てとして考える。必然的に不合理であるよう定義されたことで、ナショナルリズムは逆説的により理解しやすいものとなる。ナショナルリズムは、一種の故意に非論理的で詩的な文法を通して想像上の国民——近代的存在の疎外された本質を癒す手段を具現化し、国家と継ぎ目なくつながった人物像——を創造することで、想像上の国家共同体を用いる完全性の感覚を回復する企てとして現われるのである。国家自体が近代特有の概念であるという事実は、多方面に渡るナショナルリズムの効力を掘り崩しはしない。それどころか、ナショナルリズムの核心にある不合理性は、「美学」を特徴付ける感情の滞留——対象から感情が疎外されていない状態——を提供し、「近代言語自体」に内在する強烈な抽象概念に外観上の代替物としての力を与えるゆえに、実際にはその効力を強化するのだ。

ナショナルリズムは美学として定義されることで、特に概念としての文法的な風味を帯びる——とりわけ、飯田の完全性を求めての闘争領域である言語へのこだわりを考へるときには。おかしなことに、彼女は日本の歴史を通して生じてきた美学としてのナショナルリズムの変奏を記録に留めながら、文学テクストの分析はおしなべて避けている。その結果彼女の著書は、空想上の完全性の表現を特徴付け、それらに力を与える文

学から得た情緒的文彩の痕跡を辿らず、日本の批評作品を美的対象としてのみ扱う内容になっている。感情と論理、感動と合理性の関係は、飯田の議論における最重要点である。にも関わらず、この関係性が生じる場、つまりレイモンド・ウィリアムズが「感情の構造」^{訳注⑧}と呼ぶものを形作るために文学的・知的コードが重なり合い整合する場所は、未だ十分に探求されないままになっている。本稿が目指していることのひとつは、飯田たちのような批評家が提唱した挑戦を取り上げることである。すなわち、文学研究とカルチュラル・スタディーズから引き出した方法で、特にナショナリスト美学の主要関心のひとつである戦争に関する思想を、言語を使って表現する際に必要となる感情／感動の輪郭を探ることである。よってここでの課題は、日本の文学表現に見られる戦争の痕跡を辿ることに止まらない。戦争を、許容されるものとしただけでなく、美しいものとした文学的・知的表現の方法が、どのような力学によって絡み合っているのかを探ることが肝要となるのである。

この美学に欠かせないのは、現代世界における日常生活のありふれた姿と、国家と同一視して得る力と主体の感情との間に生じる亀裂を癒す理想的具現化として、戦争を想像可能にさせる形象化である。リオ・ブラウデイは、近代史書『騎士道からテロリズムまで』^{原注⑤}で、戦争と男性性の文化的連関を追跡している。歴史全体に渡って戦争と男らしさの理想が依然として連鎖され続けているものの、この連鎖に社会的意味を与え、文化形態は、歴史を通して戦略や科学技術に現われる違いだけでなく、展開する戦場において最も理想的な兵士像を描く様々な想像力のあり方に影響した、変遷する男性性の理念によっても変化する——と、ブラウデイは指摘している。本稿では、九〇年代中盤に発表された村上龍の小説『五分後の世界』^{原注④}を取り上げる。また、第二次世界大戦を煽動的に取り上げたベストセラー『戦争論』^{原注⑤}の続編であり、九・一一のわずか二ヶ月

ゲリラという感情の構造

後に出版された小林よしのりの政治的なマンガ『戦争論2』^{原注⑥}についても論じる。これらの作品中で、国民——ゲリラである男性的な国民——がどのように表現されたかを探求する。そして、想像上の理想的国民としての兵士の、性別を反映した性質という、ブラウデイの挑発的な最重要点を展開していきたい。

「戦士^{ゲリラ}のように」

——「日本国」の理想としての「アンダーグラウンド」

村上龍の『五分後の世界』（幻冬舎、一九九四年）は当初、より重厚な本としてすでに別の出版社から刊行された作品と同じテーマをなぞった薄くて派手な「幻冬舎文学」のように思われた。戦争・ファシズム・男性性を探求した『五分後の世界』^{原注④}は、先に発表されていた大げさでもったいぶった『愛と幻想のファシズム』^{原注⑤}の焼き直しのようにも思われた。しかし、渡部直己が文庫版の解説で指摘しているように、『五分後の世界』は、先行する小説では実現できなかった手法で読者を捉える。ほとんど何の準備もなしにもうひとつの日本の現実——「五分後の世界」の戦場——に投げ出される主人公・小田桐の拡張された描写に、渡部ははつきりと照準を合わせている。渡部は、「戦闘描写」へと直ちに主人公（と読者）を投げ込むという激しい記述を通して、村上が主人公の思考態度を「改心^{コンバート}」させていると指摘する。そして、戦闘の身に迫るような体験なしでは、日本人ゲリラ戦士のユートピア的アンダーグラウンド国家のより理性的な——直感的ではない——場面の響きが出てこないと述べている。渡部は、読者の主体に重大な変質をもたらすことなく楽しませる文学Ⅱ「読物」と、根本的な関与により読者を変質させ読んだあと別人にならずにはいられなくする文学Ⅲ「小説」とを分類する。そして、『五分

後の世界』は、村上龍が明らかに後者のカテゴリーに属することを示すと主張する（と同時に前者の典型例に村上春樹を挙げて区別する）。誰にもユートピアを描写することはできる、と渡部は言う。そして特別な作家だけが、感情的に引きつけるものがあるもうひとつの現実の形象化描写を通して、ユートピアを社会批判の必然的な帰結として位置づけることができる、と述べる。そうした作家である村上龍は、その活動と、登場人物の男性的性格と態度が酷似した作家として、「戦士ゲッターのよう」だと言われるのである。

『五分後の世界』の冒頭に描かれる戦場場面は、読者を直感的に呼び込み、読者と主人公を同様に何が起きているのかほとんどわからないままの状態で極端な暴力と目のくらむような激しい状況の真っ直中へと投げ込む効果を持つており、極めて印象の強い描写となっている。村上によって創造されたもう一つの現実——五分後の世界——は、専ら主人公の認識を通して理解される。ゆえに、物語の状況が視野に入ってくるのは、戦闘場面を一つ二つ経てからである。主人公の小田桐は、どういうわけか日本のもうひとつの現実社会に入り込んでいる。この別バージョンの日本では、アメリカ指導の「国連軍」によって日本の国家と民族が表面上は全滅され、第二次世界大戦終焉の結果として列島が完全に支配されている。しかし、「アンダーグラウンド」と呼ばれる日本人のレジスタンス運動がそこには存在する。「アンダーグラウンド」は文字通り地下に潜伏し、戦争で破壊されたかつての日本の地表下で、汚れないきちんと管理されたユートピアを築いていた。「日本国民」は、地下のユートピアを軍事基地として使用し、ゲリラ式の抵抗による不断の戦闘を戦っている。主人公（と読者）が小説の冒頭で投げ入れられるのは、日本人の反逆者と国連軍との対決現場のひとつである。

序盤の戦闘場面を見ると、戦士の人物像から感情の輪郭を感じ取るこ

とが可能である。小田桐はもうひとつの世界で、戦士としての人物像をまず強制されて自ら具現化し、後ににわか住人として進んで求めるようになる。予想通り、この具現化は戦略以外の思考をすべて不可能にする感覚の運動を必要とする。銃弾から身を守る目的から注意をそらす可能性のある如何なるものも、確実な死をもたらすのだ。興味深いことに、これはゲリラ戦なので、領土への前進が特に目的なわけではない。日本民族を全滅できないでいる抑圧者の無能さを証明する示威行為としての戦争の一種として、占領軍に向かって手当たり次第に発砲し、日本民族アンダーグラウンドの一員として単に存在し続けるだけで十分なのだ。このことは、日本アンダーグラウンドの国民によって体現された、ナショナル・アイデンティティーへの見解の提喻として機能する。「日本人性」は具体的な指示物としての日本国民から切り離され、その維持は文化的衛生の一種にのみかかっているのである。文化的衛生は、日本の言語・慣習・血統の保護を含む。だがそれだけではなく、日本人としての存在がもつ生来の意味——日本アンダーグラウンドの目的であるゲリラ戦争に参加することによって最も明確に現われる意味——の感覚を繰り返し教え込むという最も重要な必要性がある。アンダーグラウンドでの短い滞在期間に小田桐が出会うすべての人々は、小田桐に自分たちの役割を説明する。その役割とは、現存する日本を失った世界で、ゲリラ戦の有能な一団としての、そして日本人性の集積場所としての、アンダーグラウンドの存在を保護するというものである。

日本の消滅に直面しながらも日本人を保護するこの観念的誓約の感覚的土台として、戦闘体験は不断の緊急事態の状態にあって行われる、身体的高潔性の維持として描写される。小田桐が間に合わせの塹壕の中に身を隠し、明らかに女性的なものによる侵略によって身体の境界線が浸蝕される可能性を経験するとき、この体験の本質的に男性規範的な特徴

が表面化する。

小田桐はとっさに穴の中からからだを引つ込め、顔を土砂の壁に押しつけた。震動と音、右脇の土砂がひび割れ、そこに巣があったのだろう、赤い胴体と足の蟻が何千匹と這い出てくるのが、未だに燃え続けるナパームの炎に照らされて見えた。粘土質の土砂の裂け目でうごめく何千匹という赤い蟻はひどくいやらしかった。生理の時の女性器のような、残酷でむごたらしい光景だった。こいつらは何が起こっているのか知らない、と小田桐は思った。もともオレだって似たようなもんだ。(『五分後の世界』単行本・七八頁)

彼は赤い蟻に、まず親近感を持つ。その親近感、主に彼が今の自分の無知と同一視している女性的ななじみさによってもたらされる(それでもその無知は現在の戦場体験で次第に消え去っていつている)。

蟻に同一化する無知で受動的な存在は、もといた日本、すなわち一九九四年東京の平凡な世界での彼の存在を連想させる。そして彼は両者を同一視するようになる。彼はこの現実にあふさわしい住人となるために、できる限り早く自身のこうした側面を捨て去らなければならない。蟻と月経血の換喩的関連は、衛生学における排除の必要性を拡大して示す。血を流す「混血」戦士の登場によって、蟻に関する小田桐の黙考は中断される。そのあと、また血を流している別の混血同盟者が、蟻に血の混じった唾を吐きかける。

小田桐はライフルを撃つのを止めて赤い蟻の大群の方を見た。蟻は産毛のある斑点の集まりになってザワザワとうごめいているが、どこへも移動しようとしな。裂け目の奥に白いブツブツが見える、卵だろうと小田桐がおもっていると、穴の左前方から突然誰かが転がり込んできた。とっさに小田桐はライフルを構えたがそれは白人との混血の味方だった。左のこめかみから血を流している。(『五分後

の世界』七九―八〇頁)

こめかみからの血が口の中に流れ込んで、それを強く吐き出した。白い大きな歯が見えて、血の混じった唾は蟻の大群の方へ飛んでいった。(同・八四頁)

二番目に現われたこの混血戦士は粉々に吹き飛ばされ、肉片が小田桐の全身に吹きかかる。続いて、蟻に関する不安に満ちたもう一つの場面が描かれる。

肉の小さな破片が飛んできて小田桐の顔や手に貼り付いた。一人、手榴弾を投げようとした混血が上半身を吹き飛ばされ小田桐の足許に指が三本付いた黒く丸いものが落ちてきた。冗談じゃねえぞ、と吐き捨てて小田桐は反対側に掘った穴に手榴弾を蹴り込もうとしたが、ちぎれた指と手のひらの一部が靴にくっついてしまった。さらに足をのぼし、もう一方の足先で泥を払うようにして穴に落とした瞬間に手榴弾は爆発した。爆風は狙い通り真上に噴出したが小田桐は崩れた壁のためからだ全体に泥を被ってしまった。ちょうど蟻の巣のあたりの壁が吹き飛ばされたらしくて土に混じった蟻がからだ中に降ってきた。何千匹という蟻が顔を這い回る感覚に耐えられなくて、叫び出そうとした(中略)からだの半分を土砂に埋めたまま、舌と歯を使って口の中に入っている蟻を殺していた。唾液に塗られた蟻は粘膜や歯茎や舌を足で引つ掻き、噛みついた。普段だった気が狂ったようにうがいをして指で口の中を掻き回したはずだが、今はその小さく鋭い痛みが自分のものだという実感が無い。(『五分後の世界』八九頁)

兵士としての小田桐の成長は、舌と歯を使って口の中の蟻を殺すことで表面化する。彼は蟻が口内粘膜や歯茎に噛みつく痛みを黙殺するのに必要な不屈の精神を見出すのである。兵士として顕現したこの瞬間の後に、

彼は壕に侵入した外国人兵士を銃剣で突き刺す。蟻・混血・そして女性。三項の輪が今や完成する。彼は口に侵入する蟻をやっつけることができたのと同じように、外国の血が流れる兵士が彼の「穴」に侵入することも、同様に止めることができるのだ。そうすることにより彼は、戦場に存在し、恐らくは気高くて地表面世界のみじめな状態を立証する「混血児」から、象徴的に自らを区別する。残った純血日本人はみなアンダーグラウンドに住み、地表に居住している退化した「混血児」は、主人公の全身に不純な血を噴出する。小田桐にとってこの血は、ちょうど「穴」に身を屈めるときに彼を覆った泥や蟻と同じように、洗い落とさねばならないものなのである。しかし、こうした状況に抗する戦闘行為——世界と自分自身から不純なものを排除する行為——は、小田桐に、以前の東京の生活には欠けていた目的意識をもたらず。先に引用した戦争の具体的経験を通して獲得された目的意識こそが、「五分後」の日本が好きかを問われた時の小田桐の返答を導くのである——「気に入った」(二〇二頁)と。

テロリストと国民戦士のはざままで

——『戦争論2』における理想的な「日本人」

小田桐が愛するようになる、戦争で破壊された村上の小説内世界は、ナショナル・アイデンティティーから目的と結束性を抜き去る生活の平穩さの中にある一九九四年の「現実」日本に対して、明確な批判機能を果たす。もといいた日本を思い出し、小田桐は考える。

オレがもといいたところはみんなひどいおせっかいで、とんでもねえお喋りなんだ、駅で電車を待っていると、電車が近づくな、危ないから、なんて放送があるんだぜ、電車とホームの間が広くあいてる

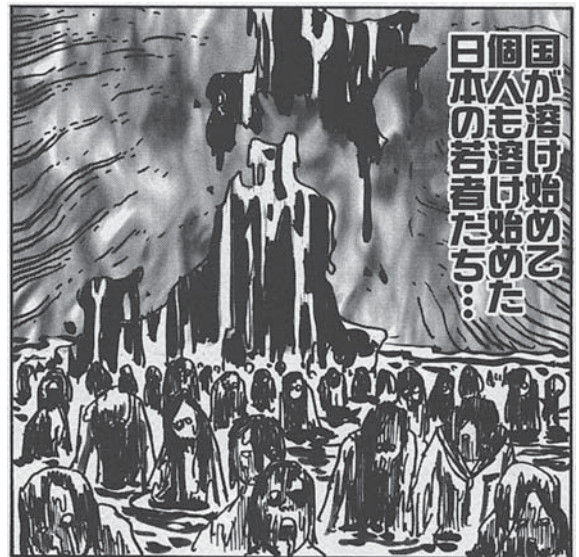
から気を付けろっていう放送もある、窓から手や顔を出すってことも言われる、放つといってくれてもいいけどだめなんだ、自分のことを自分で決めて自分でやろうとすると、よってたかって文句を言われる、みんなの共通の目的は金しかねえが、誰も何を買えばいいのかわらねえのさ、だからみんなが買うものを買う、みんなが欲しいものを欲しがると、大人達がそうだから子供や若い連中は半分以上気が狂っちゃってるんだよ、いつも吐き気がしてあたり前の世の中なのに、吐くな、自分の腹に戻せって言われるんだから、頭がおかしくなるのが普通なんだよ、こは、違う。(『五分後の世界』一〇二頁)

この平和ぼけした光景は、小林よしのりが描く日本と似通っている——すなわち、愚かなあるいは狡猾な政治家やマスメディアから、日本の戦争犯罪を誇張した話を聞かされ過ぎて自己嫌悪に陥るよう操作される、思考しない大衆が多数を占める国として小林が描く、平和な今日の日本と。この論理は小林に、方向性の欠如や現代の日常生活に巢食う虚無的な絶望と、目的の堅実さや高潔な自己犠牲、そして第二次大戦中の生活が特徴付けていると言われる単純な共同体感覚を、対照させることを可能とする。村上の小説もまた対照を形作るが、それは二つの異なる「現実」の間に存在している。小林の政治的な概要によると、解決は例外なく次のような自己形成の限定にある。すなわち、通り抜け不可能な国境地帯によって境界付けられた大陸のような地政学的情勢と、制服を着て男らしく武装し国境地帯を巡回する集団の体とが一致している自己完結した国家を反映することによって生殖するアイデンティフィケーションの様式に、自己形成を正確に限定することにある。

彼は、有名な日本人男性アイドルが、韓国の青年にインタビューするテレビ番組に焦点を当てる。インタビューの内容は、韓国で男性国民に

求められる徴兵制についてである。韓国の青年はアイドルに、軍隊に入る前に恋人と別れなければならなかったことを語る。だが小林によれば、要約すると彼は「つらいがみんなそうやって大人になる」と話したという(『戦争論2』五七頁)。ここで小林は読者に向かって言葉を挟む。「台湾の若者もそうだった。徴兵制を通じて国への義務を果たし大人になっていく」と。小林は、アジアと朝鮮半島が軍服姿で銃を掲げる若者によって文字通り支えられている一方で、日本地図の上に私服で座り込んだり寝ころんだりして喫煙している若者を描写する。韓国の青年の態度と、典型的だという日本の青年の態度とを対照させるのである。小林は次に少々驚くべき結論に達する。韓国の若い世代は恐らく彼らの祖先(協台詞によると、韓国は国民国家の形成が「遅れた」から日本との併合を「招いた」という)が抱いていた以上に反日精神に満ちており、日本の青年は今、韓国の青年が今日典型的に示している「素晴らしい」ナショナリズムから何かを学ぶべきであるというのだ。小林は、平和と戦争や、国と個人の関係性を再考する機会として韓国の例を取り上げる。そして、若者の自己本位・物質主義・暴力行為に表れる、国と個人両方の「溶解」を止めよと日本の青年へ勧告してこの一節を締めくくる。徴兵制度を通じて、あなたが守るために戦うべき国家のアイデンティティーと、個々人のアイデンティティーをどのように貼り合わせ一体にするかを学ぶことができる、と示唆するのである。個人の欲望は国家の「溶解」として暗号化される。しかも国家の「溶解」は、自己本位や個人の欲望を無制限に拡大させ、このことで個人のアイデンティティーをも「溶解」させるものであるというのだ。

ゲリラという感情の構造



『戦争論2』61頁 ©小林よしのり/幻冬舎

韓国青年の特徴であるとされる、祖国を守る強固な意志は、ひるんでしまうほど強力で(そして『戦争論2』のほかの箇所では悪魔的で老獪なものとして描かれる)反日感情を導くかもしれないとしても、少なくとも彼らの個人アイデンティティーは十分にナショナル・アイデンティティーと貼り合わされ一体となった。彼らは立派な真の大人となり、韓国旗がたなびく下に並び立ち、私服姿も軍服姿もともに変わらぬ厳格な眼で睨みつける屈強な顎をもった若者として想像されている。けれどもまさにこうした身体と国家、制服と国境の結合において、個人アイデンティティーとナショナル・アイデンティティーのきちんとしたかみ合いはずれ始め、焦点は日本の議論へと移される。政府や社会構造の形態としての国家が、個人のアイデンティフィケーションの形態としてのナショナル・アイデンティティーに出会うまさにその場において、個人と国家を貼り合わせる論理は剥がされ始めるのである。小林は、彼にとって最も強くこのかみ合いの欠如を

象徴する出来事——九・一一同時多発テロ——のドラマ化から『戦争論2』を始める。彼はこの事件を、アメリカ中心の同化力を伴ったグローバルゼーションの論理によって、ナショナリティーからナショナリズムの快適な機構を奪われた民族過激派による復讐として解釈する。彼はまた戦後日本にもほぼ同じような見解を下し、アメリカを次のように位置付ける。アメリカは日本から軍隊を奪った国だ。日本の国益はアメリカの国益に従属している。アメリカ中心の多国籍企業によるアメリカ式思想や物品の拡散は、日本の文化を奪っている——と。九・一一に対する彼の反応は、予想された通り複雑だ。たとえばテロ攻撃を最初にテレビで観たときのことを、彼は次のように報告する。

正直に言おう。あの瞬間にわしが感じたものは「希望」だった。(中略) 驚くべきことに思わず自分の中の「反米感情」が噴き出してしまったのだ。(『戦争論2』一八頁)

それから彼はテロリストの行為を非難する。テロリストは、『戦争論』で日本社会の秩序を守る「高貴なわし」として小林を「戦争」へと向かわせた、安寧を乱すオウム真理教と同等に非難すべきものであると主張する。しかし、オウム事件はただの「戦争ごっこ」であり、九・一一の爆撃は「本当の」敵——世界貿易センタービルに象徴される、境界の溶解とグローバルゼーションによるアイデンティティーの希釈過程——に抗する「本当の」戦争開始行為であったと主張することで、彼は事件を理解する。このイメージは、アメリカ主導の「連合軍」に支配された村上龍の小説世界の光景と、かなりうまく並び立つ。小林はテロリストの行為自体に対する見解を、いつになくアンビヴァレントな仕方でもとめる。

わしは「国家」という秩序の枠組みを守るためあえてイスラム原理主義の「テロ」は許さぬという立場を取る。(案外ビンラディンに共感を覚えつつ…) 最悪の場合「細菌兵器」や「核」や「原発攻撃」に

結びつく可能性もあるからだ。(だから苦渋の思いでテロと戦う道を選ぶ) (『戦争論』二四頁)

括弧書きの部分は、背景に書かれた吹き出しの文である。一方、本文は爆発したように鋭利に尖った吹き出しの中に、太字の活字体で書かれている。小林はこの問題を割り切っていないことを強調するために顔の半分を影で描き、この立場を取る痛みで顔をしかめ、汗のしずく——マンガの様式上の慣習で内面の葛藤を表す——を滴らせている。



『戦争論2』24頁 ©小林よしのり／幻冬舎

小林が読者を指さして意見を太字で叫ぶイメージに満ちたテクストのなかで、このアンビヴァレンスな場面は例外的であり目に付く。実際、漫画家であり公的な知識人でもある彼の全事業は、自信があり「「ゴーマン」であることの快楽を体現し強く訴えることであり、『戦争論』シリーズは所詮『ゴーマニズム宣言』シリーズの最新版に過ぎないのだから。

ペン・剣・銃、そしてさらにある妄想の場面では滑稽なほど特大な耳かきを振りかざす彼自身のイメージ訳注④を繰り返すことによって、小林は作家であり日本人である自分の立場を、兵士としての立場と並べることができるのである。こうして、たとえば一九九五年のサリンガス攻撃への自分の反応を、「オウムとの戦争」とみなすことができるのだ。このことはまた、『五分後の世界』のような小説を書く村上龍を、「戦士ゲリラのよう」だと論じた渡部直巳の主張とも重なる。二人のゲリラ作家たちはこのように自己主張し、秩序を作る権利を守るための戦いを暴力行使の正当化を通して行うことによって、国家の代理人としての自己を演じる。しかし同じ論理によって彼らは、軍隊を奪われ、外部からの攻撃に受動的な反応をしたり、米国によって行われる軍事活動を補完したりすることしかできない、今日存在する日本国家に取って代る。小林の見解によると、オウム事件は、直接の戦争体験を持たないために自己満足的な麻痺状態にある現代の人々に衝撃を与える潜在力を含んでいた。しかし、国内での攻撃だったため、ほとんどの人々はただ現代の「混沌」の延長であるとして誤認し、小林いわく大人になって祖国のために闘う呼びかけをつかみ損なった。他方で九・一一は、日本の秩序に対する少し異なった脅威の様式を意味する。それは、小林の政治的主張の中心的な機構を形作る兵士の特定様式、ひいては男性的な国民主体の様式をはっきりと浮き彫りにするものである。

九・一一は、平和を弁護する憎むべき「サヨク」や、米国主導の「テロとの戦争」で日本を積極的な役割へと推し進める保守派の政治家と、小林との違いを明らかにする機会を彼に与える。彼はサヨクへの批判で、「平和」の反意語は「戦争」ではなく「混沌」無秩序無秩序であり、無秩序を抑えるための唯一の方法は、戦争を通して平和を保つことであるという立場を繰り返す。しかし、保守派への批判は、彼をさらに難しい立場に

置く。結局、テロとの戦いとは、まさしく混沌（平和の真の反意語）の力に対抗して行われる軍事活動を通して日常生活の秩序を守る、戦争の一種ではないのか？ 小林は「違う」と主張する。実は「テロとの戦い」は、グローバリゼーション政策によって今戦っているテロ組織そのものを創造してしまったアメリカの利益と国際的影響力、日本のそれらを単に従属させるだけだというのだ。先述した内面の葛藤場面を形作っているのは、小林の議論のこの部分だ。彼は「国家と呼ばれる秩序の構造」のために戦い続けなければならないことを知っている。だが、テロリストたちにも親近感を覚えずにはいられないのだ——アイデンティティとナショナルティティが堅固に同義語であって、アイデンティティ、ナショナルティティ、そして国家を結合する、換喩的な鎖の連携を取り戻すために、国家を溶解させるアメリカ型のグローバリズムの力に抗ってただ善戦するテロリストたちに——。

しかし彼は、アメリカや西欧中心のグローバリゼーションに相対する日本の立場と、テロリストたちの立場との違いを注意深く明確に説明する。テロリストたちは実際には民族性と宗教だけを持っていて国家を持たず、それゆえ彼らは「ナショナルリズム」——彼らが戦っているのはもともとこの欠如を修正するためだ——を保有しているとは言えないというのだ。それに対して日本は、すでに民族・宗教・ナショナルティティと国家との神聖な連携を体験している。ゆえに必要なのは、ただそのことを正確に思い出すことだけなのだ。よって、たとえば世界貿易センタービルとペンタゴンに飛行機を突入させたテロリストたちは、戦争中に連合国の軍艦に飛行機で体当たりした神風特攻隊と同等に扱うことはできない。テロリストたちはナショナル・アイデンティティが欠如した現在の行為的表出である「ニヒリスト」であり、現世では認められない官能的な欲びのある天国での生活へと利己的に向かうように見えた（小林

は読者に、テロリストの中には天国で殉教者を待つ神女パシジのハーレムへ赴くことに備え、局部に香水をふる者さと告げる。一方で、特攻隊は個人の利益に取って代わるナショナル・アイデンティティーに満ちており、ゆえに「ニヒリスト」より非常に誠実なナショナルリストとして理解され得る。そのため、特攻隊の行動は共感できる感傷的なものではなくて、立派で高貴なものであった。

こうして小林は、「アイデンティティー・ウォー」の現在における、戦争の意味を理解するための規定を打ち立てる。「アイデンティティー・ウォー」は、資本主義と共産主義が対面した冷戦を書き直し、互いに相容れない二つの一神教の対立を作り上げたものである。対立する二つとは、均整のとれたグローバリズムの怪物たち——世界的な支配力をふるい他のすべての国家を溶解するアメリカの傲慢なナショナルリズムと、世界中のテロリスト下部組織に資金を送るアメリカのグローバルな資本ネットワークのアンダーグラウンド版に依存する国家無き原理主義者でニヒリストであるイスラム教徒たち——である。このコンテキストでは、こうした世界政治の配置の中で、日本がアイデンティティーをどういった形にするか決意しなくてはならない時が来ているということになる。小林は紙面から指を差して読者に対峙する。

では我々日本人のアイデンティティーとは何だ？ そもそも日本人とは何者か？（中略）アメリカに敗けて飼いならされ反アンチ・アメリカを失くした日本の保守派は恥というものを知れ！ ビンラディンのツメの垢でも煎じて飲め！ わしを日本のビンラディンと言う者も出てくるだろう。しかしわしは一神教ではない！ 大敗北を喫した日本の先の大戦を徹底的に分析し、我々は意識下に眠る何かを：喪失してしまった何かを探さねばならない。日本人の真の姿と巡り合ってみなければならぬ！（『戦争論2』三〇—三二頁）

小林が配置する「アイデンティティー・ウォー」のコンテキストで、至る所で衝突するアイデンティティーの欠如／巨大化を癒すのにふさわしいアイデンティティーを付与する歴史をもつ世界で唯一の国家として、日本は浮上する。鍵となるのは、戦争中の国家色に染まったアイデンティケーションの感情的結果として小林が思い描く一体感を保護すると同時に、そのように団結した国家の名において行われた残虐行為を償ったり認知したりする必要をなくす形で第二次大戦の体験を思い出すことである。日本人のアイデンティティーを、ユダヤ・キリスト教のアメリカ人、またはイスラム原理主義者のそれらから区別できる表向きの理由は、他者に不寛容でない形でうまく日本国民を団結すると小林が主張する、神道の多神教的性質に関係している。しかしながら、彼は宗教としての神道については詳しく知らないことを認める。『戦争論2』の最終章「カミの国は死者の国でもある」で明らかにされるように、神道のなかで彼の心を惹くものは、アニミズム的・多神教的な性質というより、天皇崇拜と戦死者との交霊を通して日本人が国家としてのアイデンティティーを確立することができること、つまり技術としての有効性である。このように、去勢され分割された絶望的な現下の日本の政治情勢に希望を再注入するであろう感情の構造としてだけでなく、民族的・宗教的アイデンティティーが、有機的にナショナルリティーと完全一致する国家としてどのように存在すればいいかという、世界の国々に対する模範として、戦時の日本国体は取り戻されるのである。

『戦争論2』の最後のコマは、空一杯に浮かぶ戦時世代の優しい笑顔に囲まれ、現在から完全に分離し、透明な輪郭になることで死者の共同体と再結合する、恐らく究極の保守的示威行為を演じる小林の姿を描く。この場面では、現代日本のイメージに絶えずつきまとう「透明」という言葉の比喩的用法が裏返しに再借用されている。「透明」という言葉は、

十四歳の「少年A」が、殺人者になる前の生活を説明する際に使った「透明な存在」という言い回しに手がかりを得ている。この言葉は、大衆の想像力や、宮台真司（そして実は村上龍も含む）のような作家による文化批評でのなかで一般化されてきた。「透明」は、物質的な商品は（今のところ）容易に入手できるが、国家としての——共同体の目的として暗号化された——「希望」は入手できないというのが特徴である日常生活の経験を無感覚にする、不毛のメタファーとなった。^{原注⑩}



『戦争論2』530頁 ©小林よしのり／幻冬舎

こうした論理の小林版では、暴力をもたらす「透明」という特殊な感覚は、素朴な平和のレトリックのなかで、戦後日本体制が戦争と殺人との区別もできなかつたことが原因で生じたものとされる。子どもたちは、戦争とは人殺しであり、殺人は常に悪であると教わっている。そのため、戦争中に起きた殺戮のあり方を検討する際、兵士は戦争中に誰でも嫌い

ゲリラという感情の構造

な人間を手当たり次第に殺すものと誤って思い込んでいる。子どもたちは国家の敵を殺すことと、単に嫌いな誰かを殺すこととの間にある重要な区別を奪われる。戦後の弛緩した平和の中の子どもたちは、「誰を殺すべきか」という問いに答えのないまま放置され、それゆえ自分自身の答えを見つけるために殺人を実験するのだという。議論のアーリーナはまた、明確な政策の問題であるよりむしろ感情の構造に集中する。重要なのは、誰を殺すべきかを知ることではなく、殺してもいい人々のカテゴリーの存在を知ること付随する、共同体感覚である。そのカテゴリーの名称とは、「国家の敵」である。誰がその内容にあてはまるか——連合軍であろうが、植民地朝鮮の反抗的な国民であろうが、イスラム原理主義者のテロリストであろうが、洗脳されたオウム真理教信者であろうが、国家の意志を促進するために身体的存在を犠牲にすることを拒絶する個人によって示される利己的な生存への欲望であろうが——は問題ではない。それよりも重要なのは、国家色に染まった個性に、アイデンティフィケーションの進路をつかむ欲望の無制限の活動を制約する確固たる境界を与えることであり、そのために「国家の敵」というカテゴリーが存在すること自体なのである。

このように自身を「透明」とすることは、現在の生活から価値を抜き取ることをほのめかす。また、小林が不可視な者——前線や銃後での日常生活に価値を授与する技術としての国家での、疑いのない委託を通して軍事行動を支援した戦時世代——とアイデンティフィケーションすることを示唆する。戦争を通して授与された価値を殺人行為からさえも奪うことによつて、現代生活の「透明性」の反復しか行えなかつた少年Aのようなニヒリスティックな殺人者を生産した無意味な「透明性」。この概念は、目に見えない過去でのこうした疑いなき委託行為を通して、政治的意見の相違を示す方法として再設定される。「透明性」という概念

は、適切なアイデンティフィケーション様態の欠如ではなく、優しい戦時世代の霊的イメージを通して主体の積極的な再構築として取り戻されるのである。こうした現代からの政治効力的・形式的に保守的な否定とある形の過去の集団的記憶とのアイデンティフィケーションとを「透明性」に委託することで、最終的に未来は若い世代と失われた戦時世代が前景に突出する形で描かれ、精神的に空虚で去勢された自虐的な戦後世代は破滅の影に消え行くよう描出される。

しかし、現在を回避することで乗り越えるために過去へ逃げ込むものとして理想的に具体化された国家としての再想像においては、次のような疑問が残される。すなわち、小林が定義する「アイデンティティー・ウォー」というグローバルなコンテクストの中で、日本は国家として如何に行動すべきか、という問いである。もし、テロリズムと戦わねばならないが同時に米国主導の——漫画の冒頭で小林が批難する一神教との対決という結果を招く——「テロとの戦い」に加わることを避けなければならぬならば、日本の「アイデンティティー・ウォー」への理想的な介入とはどのような形を取るべきだろうか。この問いに直接答える代わりに、小林はある仮想状況を提議する。そうすることで、戦争の必然性の主張がどんなに基礎的な感情的・道徳的真実に基づいているか——平和を最優先する人々はその事実を無視しているのだ——を明らかにするつもりなのである。小林が描く仮想未来では、日本は中国に侵略されている。学校では日本語を犠牲にして中国語が教えられ、植民地化された国家の支配的なディスコースとして、中国の文化と歴史が日本の世界の代わりをしている。しかし、この侵略は流血を伴わないものであり、中国侵略軍は国内の平和を効率的に維持する。小林は次のように想像する。すなわち、抑圧装置としての国民国家の束縛から日本を解放し、「グローバルな中華主義」の時代の原理を取り入れるよう人々を導き、最終

段階として日本への侵略を歓迎する記事を、「朝日新聞」は掲載すると。コスモポリタリズムを解放する形として「グローバルなアメリカ主義」を考える。「朝日新聞」に対する、皮肉なつつこみである。ここで彼が読者に提示する問いは、「奴隷の平和」か「自由と独立のための戦争」か、どちらを選択するのかというものである。こうした問い方からすると、小林の答えは分かり切っている。だが、現在において適切な日本国家の主体性はどのように意識されるべきかに関連するこの選択を構成する方法として未来幻想を仮定するために、彼がどのように歴史を書き換えているかを検討する価値はある。

彼は植民地化された日本の歴史の仮想未来を提示したあとで、この仮想未来はかつて入植者日本によって韓国と台湾で現実に起こされたものと指摘する者たちの反応を想像する。前掲の選択へと直接的につながるこの問いに対する彼の答えは、次の通りである。

気の毒で、残念なことではあるが、そんな危険な時代に朝鮮・台湾はまだ国民国家としてまとまっておらず、他国の干渉や侵入に抵抗できるだけの近代化がなされてなかった。

しかし、すでに「日本人の自意識」を歴史的にずっと育んできた我々が真綿でくるむような「平和な支配」を受けた時、君はその「平和」に甘んじるのか？

それとも真の自由と独立のために「戦争」するのか？（『戦争論2』五五頁）

ページをめくると、読者は突然、紙面のほとんど全面で小林が銃を向けながら「わしは戦争を選ぶ！死ぬのも殺すのもやむを得ない!!」と大きなゴシック体で叫ぶ姿に直面させられる（『戦争論2』五六頁）。このようにして、小林は現状を「アイデンティティー・ウォー」として解釈する形で、日本の歴史を書き換えることができるのである。この論理では、

朝鮮と台湾の植民地化は日本側による侵略の結果ではなく、むしろ各国におけるナショナル・アイデンティティーの力のアンバランスの結果である。朝鮮と台湾が適切に統一されたナショナル・アイデンティティーを欠いていたという主張は、植民地化された事実そのものによって同語反復的に「証明」される。同時に、日本による植民地化は、国民国家としてまとまっていなかったことによる歴史的必然として正当化されるのである。このようにして、ナショナルイズム自体は、所有可能な「もの」として物体化される。その所有物は、ある特殊な感情——歴史・国家・身体的実在が継ぎ目のない有機的な統一による国家色に染まったアイデンティフィケーションの形式に基づく感情——である。

「日本人としての自己認識」の独自の歴史に対して、日本が優位な関係にあるという主張が、この国際的な「アイデンティティー・ウォー」へ日本を参画させる主要概念として機能する。だが、それと同時に日本は米国に従属してもいる。こうした現状は、「日本人としての自己認識」を忘却の危険にさらしてしまう。国民としての自己認識を取り戻すためには、戦時世代に例示されるような国民的結束感を思い出さねばならない。そのために国家は、皮肉なことに、危険な状況に置かれる必要がある。このように解釈された日本人性を確立し表現する必要性は、個人の肉体と国家の抽象的身体を貼り合わせる「物体」を、この両者を絶滅してしまふ脅威から守る闘争としての、再想像する国家の具体化のためのコンテキストを供給する仮想状況の空想を強いる。ゲリラ戦士はこのディスコースの中で、想像可能な理想的国家の具体化を通じての形象として機能する。一方でこの仮想状況は、この形象に力と決意の感情的アウラを供給する暴力を正当化するために必要な、差し迫った危険を供給する。

小林の新国家主義の政治的レトリックの中で、外部勢力による破滅的侵略は、明らかに空想上の欲望のトポスとしてこのように機能する。村

上龍の小説に見られる究極の国民としてのゲリラ形象を通して、身体化された状態として理想的国民主体が想像され得るため、この形象は再び重要性を持つてくる。身体的な境界が国家の境界に一致するゲリラ戦士として自身を想像することによって阻止できる、「溶解」する共同社会性のレトリックは、両作品の中に響き、そこに表現される政治学の核心となる。自身をこのように想像するためには、自身が絶え間なく身体的危機にさらされていると想像せねばならない。よって戦場としての日常は、この緊急性を考え得る、効果的でレトリカルな装置となる。村上の構想では、SFっぽいもうひとつの現実の召喚は、こうしたことを円滑にするために必要とされた。しかし『五分後の世界』と『戦争論2』との間の年月には、オウム事件や九・一一のような出来事があった。そのおかげで毎日が本当に戦場のように感じられ始め、「アイデンティティー・ウォー」として日常を再想像する機が熟したのである。注目すべきは、小林の構想が、この新たに危険となった世界で、村上の構想——国家を奪われたがナショナル・アイデンティティーのために闘っている、国民的行動の理想的形象化としての日本人男性の仮想的形象の作成——と、交わり合うことだ。村上の小説が明らかにするのは、女性嫌悪の詩学がこの形象の創出に関わっていることである。同様に、女性嫌悪の強い支えとなる「純血」の政治学のアファシスト的な影響も関わっている。これらの具体的な感情の構造を通して、小林の歴史の書き換えにつきものの矛盾や、第二次大戦中の特徴的生活として思い出される理想的なナショナル・アイデンティティーの真の形象化としての日本人のゲリラ／自由の戦士（イスラム教テロリストとの区分は不明瞭）への称揚は、飯田が近代世界におけるナショナル・アイデンティフィケーションの形式として指摘する不合理な合理性を通して解決されるのである。生起する改心と戦い、固い決意を

ために、これらの美学のモードを合成し形作る様々な感情の構造に注意を払うこと。これが、これらのディスコースに向かう倫理的な読者として、我々が為すべきことなのである。

注

- 原注① Iida, Yumiko. *Rethinking Identity in Modern Japan: Nationalism as Aesthetics*. New York: Routledge, 2001.
- 原注② テリー・イーグルトン著／鈴木聡・藤巻明・新井潤美・後藤和彦訳『美のイデオロギー』（紀伊國屋書店、一九九六年四月、九頁。原著一九九〇年）
- 原注③ Leo Braudy, *From Chivalry to Terrorism: War and the Changing Nature of Masculinity*. New York: Alfred E. Knopf, 2003.
- 原注④ 村上龍『五分後の世界』（幻冬舎、一九九四年三月）
- 原注⑤ 小林よしのり『戦争論』（幻冬舎、一九九八年七月）
- 原注⑥ 小林よしのり『戦争論2』（幻冬舎、二〇〇一年十一月）
- 原注⑦ 大塚英志『サブカルチャー文学論』（朝日新聞社、二〇〇四年二月）
- 原注⑧ 村上龍『愛と幻想のファシズム』上・下（講談社、一九八七年八月）

- 原注⑨ 村上龍『五分後の世界』（幻冬舎、一九九七年四月）
- 原注⑩ 村上龍『寂しい国の殺人』（シングルカット、一九九八年一月）、宮台真司『透明な存在の不透明な悪意』（春秋社、一九九七年十一月）、高山文彦『地獄の季節』（新潮社、一九九八年二月）等を参照。高山の著書には少年Aの手紙や裁判文書が収録されている。
- 訳注① 社会道徳や秩序、青少年教育への影響を懸念する国会議員らによる政治的干渉が試みられた。公開までの論争経緯については『キネマ旬報』（二〇〇一年一月上・下旬号）掲載の「石井紘基議員VS深作欣二監督 深夜の戦い」等を参照。
- 訳注② 本文中の「現在」は、本稿が執筆された二〇〇五年を指す。
- 訳注③ レイモンド・ウィリアムズ著／若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳『長い革命』（ミネルヴァ書房、一九八三年三月、原著一九六一年）Raymond Williams & Michael Orron. *Preface to Film*. London, 1954. Raymond Williams. *Marxism and Literature*. Oxford University Press, 1977. を参照。
- 訳注④ 小林よしのりによる男根ファリスイメージの多用を意味する。
(マギル大学 Course Lecturer)